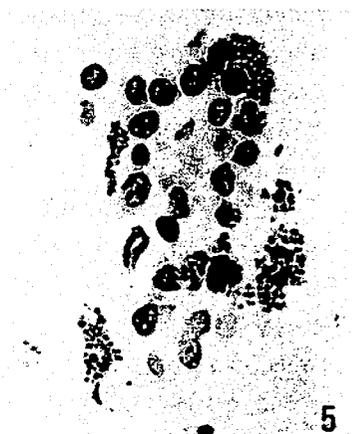
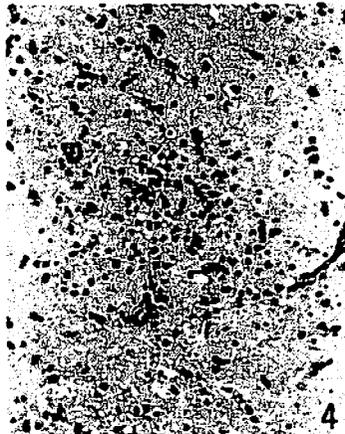
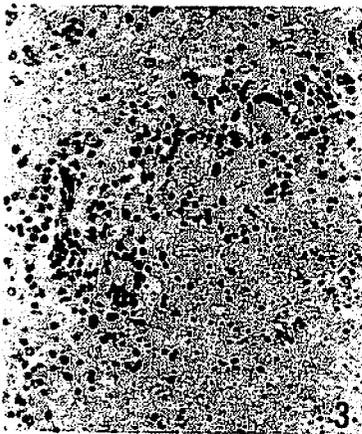
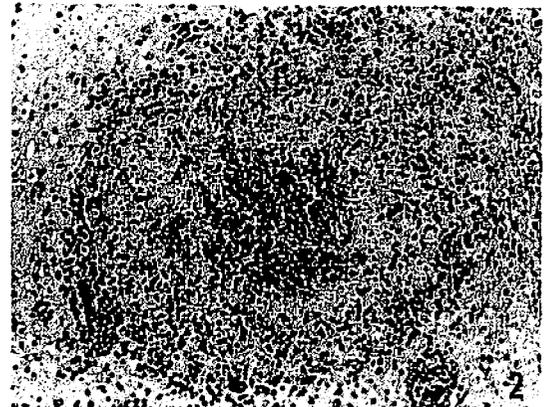
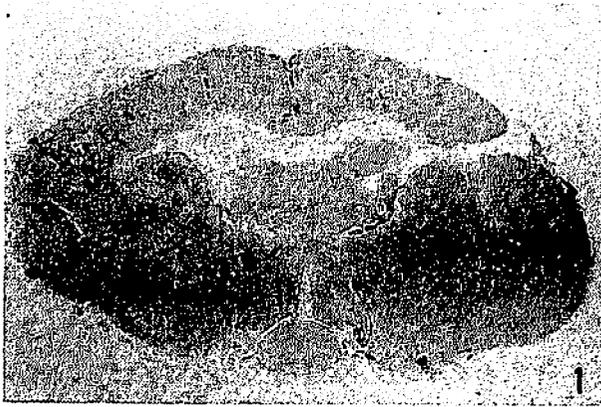


ウサギの脳

麻布大学獣医学部病理学教室出題 第24回獣医病理学研修会標本No.421



動物：ウサギ，約5ヵ月齢，体重600g。

臨床的事項：畜主の稟告によると，昭和58年4月にスーパー・マーケットにて購入したが，その時より体をかゆがっていたという。8月6日，軽度の左方への斜頸が発現し，10日より悪化した。12日からはさらに左方への旋回運動が認められ，翌日より治療を受けていたが好転せず，9月2日早朝に斃死しているのが発見され，翌3日午後剖検された。なお，外部寄生虫は認められなかった。
剖検所見：大脳表面に針頭大の白斑が多数認められ，剖面においても同様の白斑が大脳皮質・髄質および脳幹部に多数認められた。また，側脳室には拡張が見られた。腎臓には，両側性にごく小さな癍痕が多数見られたが，他の臓器に著変は認められなかった。

組織所見：肉眼所見と同様，大小の結節性病変が多数認められた（写真1，H-E，×3.5）。結節は肉芽腫の形態をとり，中心部には壊死巣があり，しばしば石灰化していた（写真2，H-E，×97）。壊死部周囲には類上皮細胞および多核巨細胞の集簇があり，さらにリンパ球，プラズマ細胞等の単核細胞浸潤が認められた（写真2および写真3，H-E，×167）。結節周囲にはほとんどの場合，大型で淡明な核を持ち，豊富な細胞質を持つ星状膠細胞の増殖が認められた。このような多発性の肉芽腫形成の他にも病変は多彩であり，非化膿性髄膜炎，グリア結節形成，ミクログリアのび慢性浸潤（写真4，H-E，×144），圍管

性細胞浸潤，血管周囲の水腫および硝子滴様物の血管周囲・実質内への出現などが認められた。また，写真1で見られるように，実質の巣状の淡明化ないしは水腫性膨化も著明であった。炎症反応の主体をなす細胞はグリア細胞，単核細胞であるが，部分的に好異球の浸潤も認められた。肉芽腫内および血管周囲などに見られた類上皮細胞，多核巨細胞あるいはマクロファージ様細胞の細胞質には，しばしばヘマトキシリンにごくわずかに染まる微細顆粒が多量に認められ，これらの顆粒は抗酸菌染色で濃赤色，グラム染色のグッドパスチャー・マッカラム変法で紅紫色，ギムザ染色で青色，PAS陽性であった（写真5，抗酸菌染色，×743）。また，グラム染色標本では肉芽腫中心部の壊死巣に紅紫色の桿状物が多数確認された。特殊染色により確認された顆粒状物および桿状物は，その染色性や特徴的な肉芽腫性病変から *Encephalitozoon cuniculi* と考えられた。本原虫が生体内に侵入した後，病変の好発部位である腎臓や脳へ到達するのは血行を介してであろうと考えられているが，本例においても原虫は血管周囲に高率に見られ，しかも病変も血管に隣接して認められることが多く，脳病変の病理発生を考える上で興味深い病像を示した例であった。

病理組織学的診断名：ウサギの *E. cuniculi* 感染による肉芽腫性汎脳炎。